

(史料解説)

御用格 (一)

「御用格」は旧津輕藩において、日々の諸政その他の便に資せんが爲に諸々の定法、規式、先例等を編集したものであり、現在弘前市立圖書館に所蔵されている。今回その目録を紹介するに当り、それについて二、三の解説を台せ加えることとしたい。

現存する「御用格」は四種に分類され(以下その各々を叙述の都合上A、B、C、Dと仮称することとする)、即ち

A 記載内容の時間的範囲について規定のないもの

B 寛政三年より文政七年迄を範囲とするもの

C 文政八年より弘化四年迄を範囲とするもの

D 嘉永元年より安政六年迄を範囲とするものと記載内容の時間的範囲によつて分けられ、さらには各巻共二部に分かれ、その前半に文政八年より天保九年までを(C)と仮称することとする)

後半に天保十年より弘化四年迄を(D)と仮称することとする)を記している。

四種の「御用格」は、それぞれ二十四巻を以て構成されるべきものであるが、中には一巻が二冊に分かれているものもあり、又現在欠巻のものもある。次にそれを表示すると

A	一	二十四巻	二十四冊
B	一	二十三巻	二十五冊
C	一	二十巻	二十冊
D	一	二十四巻	二十五冊

となる。

B以下の内容の時間的範囲の区切りについて、その根拠を藩主の在貳期間との関係においてみると、九代寧親は寛政三年襲封文政八年隠居、十代信順は文政八年襲封天保十年隠居、十一代順承は天保十年襲封安政六年隠居となっており、即ちBは九代寧親の在貳期間に、Cは十代信順の在貳期間に、D及びBは十代順承の在貳期間にそれぞれ大略一致している。

次にAについてであるが、最古の記事は明暦元

年の平藏（信政）仕官に關するものであり、^{（一）}最新のものゝは嘉永七年の湯治に關するもので、^{（二）}その記載内容の時間的範圍は極めて窄範圍である。（尚、Aは多量の点羽並びに添入が加えられているが、その中には安政六年の年号を有するものもある）

Aの成立年代について「津輕藩日記」寛政四年六月三日条に

一於御用所牧野左次郎申渡之覺

御上下一宛

高屋定次郎

銀子三枚

各儀去夏於日記方御用格帳編集被仰付候処、日々極晩迄情勤至極、^{（三）}而此度全部出来御永世之御重宝相成奇特ニ被恩召候依之目錄之遙被下覽之

出座

御目付

とある。（「津輕藩日記」同年同月条において日記物書等六人が「御用格」編集における精勤により、同様「御用格」完成を以て賞されている）

事、Aにおいても、寛政三年以前と寛政四年以降とはその墨色、筆蹟を著しく異にしており、寛政四年にAが一応の完成をみ、その後何らかの形で書き加えられていったと考えてもよいと思われる。

Aの編集開始の時期について、前掲「藩日記」に「去夏」の語がみえるが、「藩日記」寛政三年条には「御用格」編集に關する記事がみられず、高屋定次郎、奈良九兵衛両者を日記役に仰付くの記事がみられるが（寛政三年五月六日）、「去夏」はこれを意味するものと考えられる。而して編集開始の時期については「津輕藩日記」宝暦六年六月七日条に「今度御家法御式目并書物之制度御編集被仰付候ニ付云々」とあるが或いはこの記事がそれに当るものかとも考えられる。即ち宝暦六年に「御用格」編集のことが決せられ、寛政三年高屋、奈良の両名が任命され、翌年今日よりれる「御用格」Aが一応の完成をみたと考えられる。

寛政四年の一応の完成後も後世の龜鑑となるべ

きものは年を追つて書き加えられ、それとは別に藩主一代目の「御用格」が編まれたものと考えられる。(AとB・C Dの向には記事の重複は認められず、寛政四年以降においても重要な記事はB、C、Dに載せず、Aに載せて利用の便に供したものと考えられる。

「御用格」の記事内容は、同じく藩方日記方の手にある「津輕藩日記」とほぼ同じであるが、両者の性格上一般に「御用格」の方が記載が簡略であり、又同様の記事は「御用格」にあつては煩出を避けて一度記すのみにとどめられるのが普通である。しかしながら、「藩日記」に記載なきものも「御用格」に多量ではないにしても掲げられており、「藩日記」のない明暦、萬治年間、さらに「藩日記」の記事の簡略な寛文年向に欠損が多い。「藩日記」と「御用格」の記載を比較してゐると、例えば寛文元年十二月の家中への御印下賜について、「藩日記」は

十二月一日

一御一門御家老主水内記於御前御印被下

同二日

一御手廻衆江御印被下

同三日

一御本参衆江御印被下

同四日

一新地衆江御印被下

とあり、これに対して「御用格」A巻五御家中「御印被下置候節」には

一御手廻衆御本参衆新地衆江御印被下之

但二日御手廻衆三日御本参衆四日新地衆

寛文元年十二月

とある。□□□政三年の深浦町人竹越忠右衛門の御目見許可に南□□□□□□記」 政三年五月四日の条には

一深浦町人竹越忠右衛門儀先祖旧功茂有之候者

ニ付年頭御目見被仰付候此旨可被申渡旨深浦

町奉行江申遣之

とあり、「御用格」A巻拾七九浦」は

一深浦町人竹越忠右衛門先祖旧功有之ニ付年頭

御目見被仰付旨深浦町奉行江申遣之

寛政三年五月四日

となっている。

以上「御用格」について解説を一、三加えたが、要するに、「御用格」は後世編纂物ではあるが、藩庁日記方において「御用留帳」等を稟史料として編纂されたものであり、その記事の信憑性は相当に高いと考えられる。又「藩日記」に比してその記事が、詳細、網羅という点においては劣るものではあるが、分類、整理されているという特徴を有するものであり、利用法の如何によつてはその史料的价值は「藩日記」と共に非常に高いものと考えられる。

以下「御用格」の目録を紹介するが、Aを中心にし、B以下における項目の異同、記事の有無をそれぞれに附加することとする。(各項に附した番号は叙述の便宜上仮に附したものである)

(「御用格」目録)

御用格 壹

公義

御献上

(2) 不時御献上 この記事なし

(3) 御朱印

Bは「御朱印御系図」となり、C以下は「御系譜」が項目を別にして(4)と(5)の間に誤けられている。

(4) 供奉 この記事なし

B以下に附として「諸御役」がつく。

(5) 日之丸御船

C(1)、Dは「日之丸御船并御浦願」とあり、

C(4)は「御浦願」が項を別にして次にある。

(6) 御書付

C(1)に附として「御家御書付」がつき、Dは「御家御書付」の項を別に独立せしめている。

(7) 御届

(8) 御願

C以下は「御願御伺共」となっている。

(9) 鳴物停止御定

(10) 諸事

(11) 近衛様 醍醐様

御用格 貳

御家

(1) 御誕生 ㇿㇼ ㇼは記事なし

(2) 御目見 ㇿㇼ、ㇿㇼ 記事なし

(3) 御月並 ㇿㇼ、ㇿㇼ 記事なし

(4) 御縁組 ㇿㇼ、ㇼ 記事なし

(5) 御家督 ㇼ 記事なし

(6) 御陸居 ㇼ 記事なし

(7) 不時御登城 ㇿㇼ以下 記事なし

B 以下附として「御外勤」がつく。

(8) 御官位 御官名

(9) 御承祖 ㇼ項目なく、ㇿㇼ以下項目あるも記事なし

(10) 御養子 ㇿㇼ 記事なし

B は「御嫡子御養子」とある。

(11) 御上下

(12) 高覧

(13) 御出

(14) 御名代 御使者

B は附として「他領江被遣物」がつき、ㇿㇼ は「御名代」と「御使者」が項目を別にして

おり、ㇿㇼ、ㇼ は「御名代附他領御使」となっている。

ㇿㇼ は次に「他領江被遣物」の項がある。

(15) 他領へ使者 ㇿㇼ 記事なし

(16) 御機嫌窺

B は「御機嫌伺」、ㇿㇼ 以下は「窺御機嫌」となっている。

(17) 御逢 ㇼ 記事なし

B 以下次に「上々様諸事」「那須様一件」の二項目がある。ㇼ 後者については B ㇼ 記事なし

御用格 参

御規式

(1) 御能御囃子 ㇿㇼ 記事なし

(2) 御規式 B 以下項目、記事共になし

(3) 御祝儀事

B は次に、ㇿㇼ 以下は ㇿㇼ の前に「三日月御祭事」(ㇿㇼ 以下は「ㇿㇼ」の項を掲げている。ㇼ 記事なし

(4) 御料理事 ㇿㇼ、ㇿㇼ 記事なし

(5) 御禮廻御用捨 とゆ、こい 記事なし

こい、Dは「御禮御用捨」とする

御用所

(1) 御家老 御用人(本文の項目は「御用所」となっている)

こい以下は「御用所」「御家老」「御用人」

の三項目を各々独立せしめている。

(2) 諸事見分

B以下次に「登下諸事」の項を設けている。

(3) 對客 Bは項目、記事共になく、こい以下も記事を書いていない。

(4) 着服

こい以下に附として「羽織御厄」がつく。

(5) 頂戴物

B、こい、こいに附として「拜見物」が、同じくDには「拜見物并差上物」がついている。

(6) 御城代

こいは「御廊下詰御城代」となっている。

(7) 大目付 御目付

B以下次に「御使番」の項がある。

(8) 日記方 書物方 表右筆

Dは「日記方書物方表右筆御右筆」とある。

尚B以下に於いて各項の順序が若干変つてお

り、即ちBは(4)以下が(6)、(4)、(5)、(7)、(8)、

(7)の順、こいは(1)、(2)、(2)、(3)、(6)、(4)、(5)

……の順、又こいは(3)と(4)が逆、さらにDは

(1)、(2)、(4)、(2)、(3)、(5)、(6)、(7)、(8)、(7)の

順になっている。

御用格 四

諸頭

(1) 三組頭

こい、Dは「面組頭」「御留守居組組頭」の

二項に分かれている。

(2) 諸物頭

(3) 御中小姓頭 御徒頭

B以下は「御中小姓頭」「御徒頭」の二項に分

かれている。

(4) 御寺弓頭 御寺筒頭 御手道具頭

Bは「御寺弓頭」「御寺筒頭」「御手道具頭

」の三項に分かれている。

(5) 組引渡 こい、D記事なし

B以下次に「弘前別段」の項がある。
T記事

御用格 五

御家中

(1) 被仰出

(2) 御城廻被仰出

B以下「御城中被仰出」とある。

B以下次に「江戸表被仰出」の項がある。
C他

(1) 記事なし

(3) 御目見

(4) 月並

(5) 御奉公見習同御宛并引取

Bは「御奉公見習并□□□□取輕き者申立御
暖在抱」とある。

(6) 御紋形

(7) 衣類

(8) 名取

(9) 苗字改C(1)記事なし

(10) 組替 同右

(11) 次第

C(1)に附しして「諸手廻」がついている。

(12) 御印被下置 D項目記事共になし

B、C(1)、C(11)は「御印」とある。

(未完)

(附記)

この「御用格」の基礎調査は、大江正文、川
浪洋一・原田正信の三君が行なひ、解説文は
大江君が書いた。他に佐藤仁、大川祐夫両君
の協力をも得た。

(宮崎)